



CENTER NEWS

OCTOBER 2017

www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp



AMEE 欧州医学教育学会 2017 開催都市ヘルシンキの風景

Contents

- センター長就任挨拶 2
センター長 山嵜 達也
- 医学教育学部門教授就任挨拶 2
教授 江頭 正人
- 医学教育セミナー 100 回を振り返る 3
講師 大西 弘高
- 価値に基づく診療 (Values-based Practice: VBP) 3
講師 大西 弘高・客員研究員 野村 理
- 韓国医師国家試験へのタブレット式端末による CBT 導入 3
講師 大西 弘高
- 2500 年前のギリシャの医師ヒポクラテスについて
(第 100 回記念東京大学医学教育セミナー) 4
東京大学名誉教授 初代東京大学医学教育国際協力研究センター長 加我 君孝
- 初年次ゼミナール理科 5
教授 江頭 正人・講師 孫 大輔
- 臨床導入実習・模擬患者つつじの会 5
講師 孫 大輔・特任専門職員 澤山 芳枝
- 多職種連携教育 (IPE) 5
講師 孫 大輔・特任専門職員 澤山 芳枝
- 日本医学教育学会大会 in 札幌 6
講師 孫 大輔
- 東京大学医学教育基礎コースについて 6
博士課程大学院生 密山 要用
- Pacific Partnership 2017 (ベトナム) 参加 6
博士課程大学院生 林 幹雄
- Dr. Kang-Ting Tsai 挨拶 6
研究生 Kang-Ting Tsai
- AMEE (欧州医学教育学会) @フィンランド参加記 7
講師 孫 大輔
- 2017 年度外国人特任教員 Dr. Park 挨拶 7
特任准教授 Yoon Soo Park, PhD
- センター日誌／編集後記 8

センター長就任挨拶

センター長 山嵜 達也

2017年4月から医学教育国際研究センター（IRCME）のセンター長を拝命しました。昨年9月から副センター長としてIRCMEに参画していますが、より責任が重い立場となり、身の引き締まる思いです。私の本職は耳鼻咽喉科学教室の教授ですが、准教授時代から教務委員として学生教育に加わっており、2007年から4年間国際交流室の室長を務めた折にはInternational Training Programの担当教官として医学部学生と教官の海外派遣に貢献しました。2011年から6年間、附属病院総合研修センターセンター長となり、北村聖総センター長の下で研修医の教育と指導体制に関する諸問題の解決・改良に取り組みました。2015年に医学部の臨床実習室の室長となり、2016年には臨床主任としても医学生の教育に関わってきています。

東京大学医学部の教育はこれまで継続的に見直しが行われてきました。教育法は知識伝授型から問題解決型に、臨床実習は見学型から参加型に移行してきています。昨年（2016年）には筆記試験の卒業試験を廃止し、臨床実習修了後試験として患者問診・診察技術・知識問題という構成の試問2問と実技試験を行いました。これは、単なる医学知識だけではなく、実臨床に即した医療

技術・コミュニケーションも学生時代に習得してほしいという、学生に向けたメッセージであり、クリニカルクラークシップでの学生の意識も変わってきたと思います。この臨床実習修了後試験では、実施方法や試験内容などを毎年改良する必要があり、フィードバックしながら進めて行く所存です。



医学に関する知識と情報は急速に増えており、今後は大規模データの解析に人工知能が幅広く用いられる時代が来ると予想されます。覚えらるる知識の量には限りがありますので、今後は溢れる情報から必要で正確な情報を選択し応用する能力や考える能力が要求されると考えます。コンピューターなどを駆使した教育技法など新しい教育の確立が急務であり、問題解決型教育を充実する必要もあると考えています。上述したこれまでの経験を活かし、医学部の教育改革およびIRCMEの多方面での発展に貢献したいと考えておりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

医学教育学部門教授就任挨拶

教授 江頭 正人

2017年5月より、当医学教育国際研究センター医学教育学部門教授に就任いたしました。わが国の医学教育を牽引してくべき立場であり、身の引き締まる思いがいたします。

グローバル化や超高齢化がすすむ日本において、社会が医学部に求める人材も変化しつつあります。そのような状況のもと、医学教育のあり方も必然的に大きな改革が求められ、医学教育を担う部門の役割は今後ますます重要になることが確実です。当部門は、常に時代を先取りする教育を実践し優れた人材を社会にとどけるとともに、現場での課題、ニーズに基づいた優れた研究を行い、その成果を発信していくための体制を整備していく必要があります。

私はこれまで、医学部教務委員の立場で、様々な教育プログラムの改革にとりくんできました。主なものとしては、例えば医学科における診療参加型臨床実習の本格的な導入があげられます。しかし今後、さらなる質向上が必要であることは論をまたず、実習内容の標準化、統合化、各講座間の連携を推進していく必要があります。現在、そのための基盤整備としてWeb実習支援システ

ムの導入を計画しています。教育データの蓄積が容易になり、それに基づく分析と継続的改善が期待できます。さらに診療参加型臨床実習と実技型実習後試験との連動、シミュレーション教育の本格的導入、前期課程との接続、入試や進学選択の改革など、多くのとりくむべき課題が待ち構えています。



学内の教育プログラムのさらなる充実化と継続的改善の仕組みを形成すること、それによって優れた卒業生を育成、輩出すること、そのことをしっかりと対外にアピールして日本全体の医学教育のレベルを引き上げることに取り組みたいと思います。さらにデータに基づいた説得力のある医学教育研究を行い、医学教育分野の未来を担う若手を育成し、その力を結集して東大さらには世界の医学教育分野を発展させることに貢献したいと思います。

何卒、宜しくお願い申し上げます。

医学教育セミナー 100 回を振り返る

講師 大西 弘高

東京大学医学教育セミナーは、2008年7月が第1回であった。それまでも、外国人客員教員がセンターでの活動をしている時期には概ね月1回のセミナーを開催していたが、国内の講演者を招きたい、センター教員の研究成果も示したいといった要望により、新たな名称で年間を通して行うこととなった。夏季休暇中などは開催しないため、年間10～11回程度だが、いよいよ2017年6月16日に第100回を迎えることとなった。

第100回は是非記念になる内容にしたいと考え、お願いしたのは当センターの初代センター長である加我君孝先生であった。ヒポクラテスについてコス島にも足を運び、新たな知見が得られたので、もし機会があれば紹介したいという依頼を受けていたこともあり、この記念になるセミナーで是非お話していただくこととなった。時期的に6月で日が長いこともあり、センターが所在する医学部総合中央館（医学図書館の建物）に隣接する巨大なブラタナスを310教室から見ながらのセミナーとなった。

ちなみに、ブラタナス（Sycamore）には、夏から秋にかけて枝から1、2個鈴のような丸い実が成る。山伏の着る篠懸衣（すずかけごろも）の球状の飾りに似ているため、日本ではスズカケノキ（鈴懸の木）とも呼ばれる。医聖、医学の父とも称されるヒポクラテスが、コス島の大きな鈴懸の木の下で弟子に医学を教えたと言われ、多くの

医学部や病院にヒポクラテスの木という名称で植えられている。310教室から見える図書館入口の右手に植えられたブラタナスは、アテネ Evangelismos 病院の Doxiadis 博士から寄贈された若木が1972年に移植されたものである。いまや図書館の高さを超える巨木となり、常に我々のことを見守ってくれているかのようである。

9年ほどの時を経て、医学教育セミナーが途切れることなく継続されたことは、医学教育国際研究センターにとっての新しい歴史と言えるだろう。特に、動画中継サイト（当時のUstream）を用いた同時中継の試みは、大きなチャレンジであった。インターネット配信によって来場者が減るのではないかと危惧したが、その不安は杞憂に終わった。海外の学会等で、「セミナーの動画で勉強しています」などと外国人から声をかけられることもあり、アーカイブが残っていることが当センターの財産にもなっている。開設18年目に至る当センターの歴史を見守ってきたであろうヒポクラテスの木に思いを馳せつつ、今後も継続していきたい。



▲ 植樹から45年を経たヒポクラテスの木

価値に基づく診療 (Values-based Practice: VBP)

講師 大西 弘高・客員研究員 野村 理

VBPは患者側と医療者側でよりよい意思決定を考える際に、科学的に最も妥当な判断基準を示してきたエビデンスに基づく診療 (evidence-based practice: EBP) を補完する理論的枠組みとして英国のグループから提唱された。患者と医療者の価値に注目するVBPは待ち受ける超高齢化社会で生じうる様々な困難な状況を打開する有効な方法論と考えられる。しかしながら、日本国内で医療従事者がVBPを学び、日常診療で実践することは容易ではないことを鑑みて平成28年度より当センターの大西弘高と野村客員研究員を中心として価値に基づく診療に関する活動をしてきた。具体的には、①「価値に基づく診療 (values-based practice: VBP)」の翻訳本の出版 (MEDSi, 大西弘高・尾藤誠司監訳)、②ブログ「VBP的臨床推論」の開設、③VBPワークショップ・シンポジウムの開催 (計6回) 行ってきた。現時点 (平成29年8月末日) でブログの閲覧数は15000回を越え、またワークショップ等の参加者は120名となった。今後もワークショップのプログラム改良などを続けながら活動していく予定である。



▲ ワークショップでの Three-layer cognitive model のレクチャー

韓国医師国家試験へのタブレット式端末による CBT 導入

講師 大西 弘高

昭和大学の 高木康先生が代表を務めておられる、平成28年度厚生労働科学研究「医師国家試験の在り方に関する研究」において、2017年2月22～24日に韓国を訪問した。主な目的は、韓国医師国家試験に2020年度から多肢選択式問題 (MCQ) に対して導入予定というタブレット式端末を用いた試験についての調査であった。韓国では Smart Device-based Test (SBT) と呼ばれる方法は、有線ネットワーク+PCによるCBTから無線ネットワーク基盤のUBT (Ubiquitous-based Test) を経て、オフライン基盤のスマートデバイス活用の SBT へと進化し、本格実施への道筋が見えた。

今回は、国家試験院が驪州 (Yeosu) 市で開催していたマルチメディア試験作成宿泊にお邪魔し、試験システムの概要を尋ねた。全国同時実施で同じ問題に解答する試験システムであり、以前一時的に問題のプール化もしていたが、今はなされていない。SBTに用いるタブレット端末は、試験室サーバと無線でつながっている。これにより、動画で医師と患者のやり取りを通じ、事例の診断や治療オプションの選択を行う問題を出題することができるようになり、より臨床能力を評価できることが期待されているとのことであった。



▲ タブレット端末を利用した SBT

2500年前のギリシャの医師ヒポクラテスについて(第100回記念東京大学医学教育セミナー)

東京大学名誉教授 初代東京大学医学教育国際協力研究センター長 加我 君孝

ヒポクラテスは2500年前にギリシャのエーゲ海の現在のトルコに近いコス島で生まれ臨床医として活躍した。ヒポクラテスとその流れをくむ医師が当時の症例報告や診断と治療の、現代風と言うと「ガイドライン」ともいべきたくさん記述をパピルスに残した。その記録は後の人々の手によって書き写され、アレキサンドリアの図書館にその多くが保存されたという。中世になって印刷技術の進歩で本として残された。その原典からの大槻真一郎を中心とする人々による翻訳が『ヒポクラテス全集』(全3巻)として1985年に刊行され、東大医学図書館の貸出し図書としていつでも借りることができるになっている。図書館がこの読みやすい現代版の全集を1985年に購入してから小生が借り出した2015年までの30年間、1巻はたった2人、2巻はたった1人しか借りていないことがわかった。その後は小生が何度も借りている。訳者の一人に自治医大皮膚科の大槻マミ太郎教授がおり、医師の心得や誓いなどの医の倫理に関するところを担当されている。

東大医学図書館に向かって右側の道路に面した植え込みの中に大きな鈴懸の木がある。この木の名はPlatanasで医学の術語のPlacentaや広場のPlace、Plazの語源でもある。木の下にある説明板には1972年に緒方富雄教授がアテネのDoxiadis先生からコス島のヒポクラテスの木より譲り受けて接木で育てたものであるという。コス島の少しだけ小高い公園の真ん中にヒポクラテスの木がある。その木のサイズ全体は医学図書館前の木と類似しているが、幹は直径3mぐらいあり、その真ん中は壊死によりほら穴のようになっておりセメントが流し込まれ補強してある。かなりの老木で500年ぐらいのものだという。ヒポクラテスは2500年前にこの鈴懸の木の下で医学を学びたいとやって来た若者をエーゲ海の日射しを避けて教育したという。恐らくそれから何度も植え直して継続してきたものであろう(図1)。医学図書館前の7月のヒポクラテスの木は大きく青々として若々しい青年のようである。

ヒポクラテスはコス島で育ったが、その頃の医師は「旅医者」として地方を旅しながら治療にあたった。本拠地のコス島は現地を訪れるとアゴラ(広場)、オデオン(野外音楽堂)、屋内体育館と屋外の競技場、集会場としての市民公会堂や郊外の高台にある壮大なアスクレピオス神殿とその附属治療施設など、まるでミニアテネのようなポリスを形成していたことがわかる。農産物に恵まれ、エーゲ海の魚が豊富などところでもある。ヒポクラテスの活躍の背景にはこのような文化的背景があったと思われる。2500年前はわが国はまだ弥生式土器時代であったがインドには釈迦、中国には孔子が活躍するという人類の文化が豊かに生まれた時代でもあった。

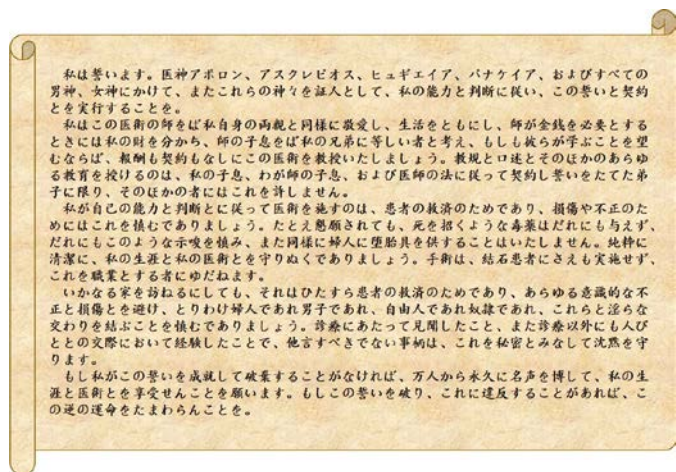
『ヒポクラテス全集』を紐解くと、その臨床の記録は興味津々で



▲ 図1: ヒポクラテスの木(コス島のプラタナス)

ある。まだ解剖学も生理学も薬学もない時代であるが、手術道具を作り、マイナーな手術をして薬草による治療をしている。1000年続いた古代オリンピックはヒポクラテスの時代にすでに4年に1回開催され、スポーツ損傷が多かったものと考えられ、整形外科の脱臼や骨折の治療法が詳しく書かれている。小児科や産婦人科や内科的な治療の解説がある。薬としてハーブやワインが処方されている。柳の木の樹皮も使われている。これは近代になってアスピリンが含まれていることがわかった。小生の領域で急性中耳炎について「熱が出て耳が痛い」と訴えるこどもは、そのあと耳から白いものがでたら助かるが、そうでないこどもは痙攣をおこして死ぬ」とある。この記述は観察が鋭い。白いものがでるといのは鼓膜が破れて中耳の膿が排出されドレーナージがついて助かったことを示しており、痙攣を起こして死ぬというのは頭蓋内合併症を起こし髄膜炎で死亡することを示している。もう一つの「てんかん」に対する考え方も鋭い。当時はてんかんは神の呪いや神の罰など人知を超えた病と言われていた。それをヒポクラテスは他の病気と同じく身体の病気で、脳の病気であると述べている。てんかんが「神聖病」と言われていたことに対して、治療し得るという見解を述べたものである。てんかんが脳の病気である証拠は1920年代のドイツのHans Bergerの脳波の発見まで時を要した。

ヒポクラテスの業績は何かと問うと「ヒポクラテスの誓い」をあげられる人がほとんどである。この訳は多数あるが私が最も優れていると感じている京大の精神科の教授であった大橋博司先生の訳を図2に紹介する。わかりやすかつ品格のある訳である。欧米でも多くの医科大学でヒポクラテスの誓いを卒業式や他の式典で声を出して読むことが多いというが、ハーバード大学やジョンズ・ホプキンス大学では現代風にアレンジして使っているという。医の倫理面では医師の心得のほうが現実の臨床に沿っている。「すすめ」と「禁止」に分けて医師の行動規範も書いている。近年は医療に関連したトラブルが大学病院でも一般病院でも開業医でも少なくなく、どのようにすれば予防できるかが現代の大きな課題である。2500年前のヒポクラテスの医師と医療に対する言葉は色褪せるところかますます輝いている。



▲ 図2: ヒポクラテスの誓い(大橋博司:訳)

初年次ゼミナール理科

教授 江頭 正人・講師 孫 大輔

2015年度より始まった初年次ゼミナール理科は、教養学部1年の全学生を対象としたチュートリアル形式の授業であり、入学直後の学生の学びの意識を改革することで、自発的に学ぶ姿勢を涵養することを目的とする。2017年度は、当センターから江頭、孫が出講した。

江頭は、「老化のメカニズムに迫る」と題し授業を行った。まず超高齢社会や個体の老化の諸問題につき、一般メディアの記事などを題材に、ブレーンストーミングなどを行い、「検証可能なリサーチクエスチョン」を抽出する作業をおこなった。後半は3-5名のグループを形成し、それぞれのクエスチョンに対する（仮の）研究計画書をデザインすることを目標に授業をおこなった。授業ではわかっていることと検証すべき課題を区別すること、網羅的な検索をおこなうこと、一次資料にあたること、データにもとづく論考をおこなうこと、などを強調し、進捗状況につきグループ間でディスカッションを行い、プロセスを共有し、より適切な計画作成が実践できるよう工夫した。最終的には、研究計画についてプレゼンテーション、質疑応答をおこなうことで、課題についての理解を深めた。学生からは、問題解決のプロセス、グループワーク、プレゼンテーションを体験することで学習が深まった、との感想を得ている。原著論文を読むことと、データの収集と解析とが実施できなかったが、それ以外には学習目標は概ね達成できたと考えている。（江頭）

孫担当の授業「健康の社会的決定要因」は理科一類～三類の学

生が21名登録。人の健康を包括的にどのようにとらえるか、さまざまな心理・社会的要因の影響を考えるようなゼミを行った。前半では、ソーシャル・キャピタルと高齢者の健康の関連を分析した論文（和文）を読み、論文の基本的構造と読み方、そして、その結果と考察をグループでプレゼンテーションをさせる内容とした。後半は、病いの生物-心理-社会モデル（BPSモデル）や健康の社会的決定要因（SDH: social determinants of health）について学んだ。ゲスト講師（NPO患者スピーカーバンクの患者講師および現場の医師）に来てもらい、患者のナラティブを聴く内容や、現場の医師から話をしてもらい社会的困難（貧困など）を抱えた患者へのアプローチについて学ぶ内容とした。またフィールドワークは渋谷で、街歩きやインタビューを実施した。学生は、小学校の副校長にインタビューしたり、ホームレスの多い地域を視察したりしてその経験を考察した。学生の感想では「授業で論文を読み解き、実際にフィールドワーク調査などをやることで、健康という概念を科学的に扱うことに興味を覚えました。このゼミを通じて様々な他人の考えに触れ、柔軟に異なる価値観を受け入れられるようになりました」などの記述があった。（孫）



▲ 授業「健康の社会的決定要因」でのワークショップ風景

臨床導入実習・模擬患者つづきの会

講師 孫 大輔・特任専門職員 澤山 芳枝

臨床導入実習は5月12日に「臨床導入実習オリエンテーション」を江頭教授が、5月17日には「医療面接実習総論」を孫が担当し、医療面接の基本、および医療コミュニケーションの講義を行った。5月26日～7月7日まで毎週金曜日に医療面接実習と救急医療実習を実施した（7週、2班ずつ）。実習には江頭教授、堀田先生（臨床実習・教育支援室）、孫で実習指導にあたった。今年度より、この実習に出席することを共用試験OSCE受験のための必須条件とした。そのため、出席率や態度に昨年度より明らかな改善が見られた。

模擬患者つづきの会は今年度、新たに7名（男性3名、女性4名）の新期生（6期生）を迎えた。会員は合計36名（男性5名、女性31名）である。4月から4回養成コースを実施し8月に修了試験を行い全員が合格した。養成コースでは先輩模擬患者が今までの経験を活かして、積極的に指導する立場にまわっており、屋根瓦式教育が実現できている。学内では、10月の共用試験OSCE（医学科4年生）、12月の臨床実習後試験（医学科6年生）に協力する。学外の活動としては、7月16・17日に実施された日本プライマリ・ケア連合学会専門医試験のOSCEに24名の模擬患者が参加した。



▲ 第6期生修了式にて全員で

多職種連携教育（IPE）

講師 孫 大輔・特任専門職員 澤山 芳枝

4月7日に医学科4年生・健康総合科学科（看護学）3年生合同による多職種連携教育（IPE）の授業を行った。この授業は2015年度より開始して3年目となる。学習目標は、多職種連携の基礎となるチームワークやコミュニケーション、相互理解などについて学ぶことである。今回はACP（Advanced Care Planning）のシナリオを用い、終末期ケアにおける意思決定を医師や看護師の立場でどう考えるか、患者家族の立場を多職種で協働しながらサポートするにはどうすればよいかという課題について、アクティブラーニング形式で学習した。学生は、医師役、看護師役、患者家族役に別れ、ロールプレイを行い、その後、医療倫理の四分割表を用いてロールプレイの振り返りを行なった。その後、全体共有し、ACPについてのミニレクチャーを行なって終了した。

学生の感想（アンケート）では「こういう場面にあっては情に訴えかけ、共感するということが重要だと気付いた。普段の勉強とは真逆の頭の使い方をして、このような能力の重要性に気づき貴重な機会となった」（医学生）、「ケア以外において看護師の役割、看護師にしかできないことは何だろうと思った」（看護学生）などの気づきが述べられていた。



▲ IPE授業におけるロールプレイの様子

日本医学教育学会大会 in 札幌

講師 孫 大輔

8月18-19日に第49回日本医学教育学会大会が札幌コンベンションセンターで開催された。基調テーマは「地域と共に医学教育を発展させる」であった。シンポジウムのテーマは、プロフェッショナリズムや行動科学に関するもの、多職種連携教育、地域参加型医学教育や地域包括ケアに関するテーマなどが目立った。特に、シンポジウム「アンプロフェッショナルな行動への対処～卒前・卒後の連携～」は聴衆も多く、注目を集めていた。講演は、京都大学におけるアンプロフェッショナル評価の取り組み（京都大学・錦織宏氏）、アンプロフェッショナルな行動に対する再教育（金沢大学・野村英樹氏）、薬物依存矯正プログラムからの示唆（成城大学・南保輔氏）など興味深い報告が続いた。口演発表では、当センターから孫が「わが国における医学教育アウトカムに対する患者と医学生の視点」という発表を行なった。モデル・コア・カリキュラムのアウトカム8項目について、患者および学生にインタビューを行い、質的分析をしたものである。その他、International Sessionや学生セッションなど、興味深い研究や教育実践の報告が多くなされていた。今後、わが国の医学教育研究のさらなる発展を願うものである。



▲ 学会に共に参加した大学院生林氏と

東京大学医学教育基礎コースについて

博士課程大学院生 密山 要用

東京大学医学教育国際研究センターでは、2011年度より教育業務を担当される先生方を対象に、実践的な教育法の基礎とその理論を学べるコースとして、医学教育基礎コースを年8回実施しています。本年度で7年目になりますが、毎回学内15名前後、学外10名前後の参加をいただき、教育に対する医学部・病院の先生方の関心が徐々に高まってきているのを感じております。内容は、アクティブ・ラーニングやインストラクショナル・デザインといった教育全般に共通するもの、プロフェッショナリズムや臨床推論といった医療専門職に特化したもの両方をバランスよく実施しております。また、本レクチャー自体にもアクティブ・ラーニングが取り入れられており、学内学外の教育に関心のある方々の意見交換の場という貴重な機会をつくることができいております。社会の変化とともに変わりゆく医療の世界において、医学教育も変化してくるものと思われれます。しかし教育という行為の普遍性は変わらないのではないのでしょうか。この基礎コースを通して、医療専門職の教育へ情熱をもって取り組む人材の養成と交流をより一層すすめてまいります。今後ともご支援のほどよろしくお願い致します。（事務局担当者：密山）



▲ 第1回講座にて

Pacific Partnership 2017 (ベトナム) 参加

博士課程大学院生 林 幹雄

2017年5月7日から5月18日にかけて、NGO代表としてPacific Partnership 2017に参加させて頂きました。アメリカ、イギリス、オーストラリアの医療関係者と協力して、ベトナム（ダナン）において医療支援活動を行いました。本年度の活動では、現地のいくつかの病院で医療活動を行いながら、多職種を対象にした教育活動を実施しました。私自身が主に活動したのは、ダナン総合病院という1200床の同地域における中核病院ですが、主な医療活動として、同病院の救急外来において、現地の若手医師らと一緒に診療を行いました。また、教育活動については、5 micro skillsという医療者向けの教育スキルに関する講義をベトナム語に通訳して頂いたり、英語で準備していた資料の一部をベトナム語に翻訳して頂いたりしながら教育実践を行いました。今回のような英語が通じない文化圏での活動経験を通じて、現地における医療現場のニーズを把握し、その文脈に沿った形で医療支援活動を行うことの難しさをあらためて体感しました。昨年度（パラオでの医療支援活動）と同様に、自身にとっては非常に貴重な経験であったと実感しています。

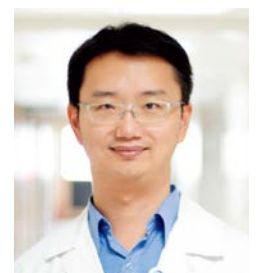


▲ 現地医療スタッフを対象にした教育活動の様子

Dr. Kang-Ting Tsai 挨拶

研究生 Kang-Ting Tsai

I am Kang-Ting Tsai, a geriatrician and family physician from Chi-Mei Medical Center in Tainan, Taiwan. As a family physician, I had much experience of home visits. As a geriatrician, we care inpatients by multidisciplinary team work following comprehensive geriatric assessment (CGA). However, we fail to care patients by multidisciplinary team work at home. Moreover, we lost the connection with patients after discharge. I tried to build up a team to provide high quality care at home, but there were still many problems in cooperation and service delivery. Japan has developed a mature integrated community care system for the elderly, which has a close connection to hospitals. Taiwan will need this system in the near future, and I hope to learn more from Japan experience.



Dr. Onishi taught me a lot since we knew each other. He is experienced in both medical education and clinical care. It's my honor to learn from him in The University of Tokyo.

AMEE（欧州医学教育学会）@フィンランド参加記

講師 孫 大輔

今年の AMEE は北欧フィンランドの首都ヘルシンキで開催された。年々、参加者は増加傾向となっており、今年は 90 カ国以上から、約 3700 人が参加し、1900 以上のプレゼンテーションが発表された。初日の Plenary では、フィンランドの教育専門家である Dr. Pasi Sahlberg による講演が印象的であった。フィンランド型教育の特徴として、テストや選択といった競争主義ではなく、信頼・協調・社会的公正性などが挙げられ、特に公平性 (equity) が教育の質を高める鍵であると。公平性の高い社会の代表である、フィンランド、カナダ、日本などで PISA (OECD 学習到達度調査) スコアが高いというデータも示されていた。

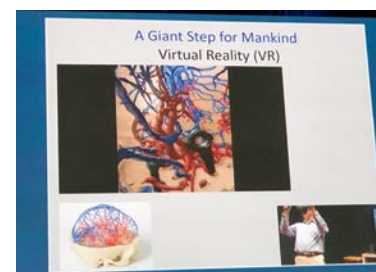
また、当センターから参加した筆者は、"Students' and Patients' Perspectives on National Medical Education" という ePoster 発表を行なった。ePoster セッションでは今年から "Learning Toolbox" というシステムが導入され、これを利用してプレゼンの制作や当日の発表を行うのであるが、基本的にタブレットやスマートフォンを前提とした仕様となっており、このアプリ上で、他の ePoster を検索、閲覧できる。また SNS のように、リンクに飛んだり、発表者とコミュニケーションがとれる仕組みとなっており、学会におけるプレゼンテーションの新しい時代を感じさせるものであった。

個人的には行動科学教育、特にヒューマニティ教育に関心があり、関連のセッションに多く出席した。ヒューマニティ教育では、「共感」(empathy) に関する発表が多く行われており、現在では

欧米のみならず、アジアや中東圏からも多くの発表があった。心理的尺度を用いた量的研究のみならず、芸術的手法 (映画、詩、患者への手紙など) を利用したヒューマニティ教育の効果、人類学者や社会学者との協働による学際的アプローチ、などの発表が行われており、こうした行動科学分野の教育が、世界的に大きく関心を持たれていることを実感した。

Closing Plenary では、PechaKucha セッションが行われた。PechaKucha セッションでは、1 枚 20 秒で、20 枚のスライドを次々と連続投影しながらプレゼンする。一番驚きだったのはオーストラリアの Dr. McMenemy (Monash 大学) の「解剖学を教えるのに献体がまだ必要か?」というプレゼンであった。現在、3D プリンターモデルや、VR (仮想現実) 技術により、解剖学教育が革命的に変化しており、教育効果も従来のものと比較しても高いとのこと。おそらく今後は、3D プリンターモデルが世界的に普及することが予感された。

AMEE への日本からの参加も年々増えており、日本人会 (Japan Night) は今年、45 名の参加であった。来年は、スイスのパーゼルで 8 月 25 日 ~ 29 日に開催予定である。



▲ VR 技術を使い、脳内の血管系・神経系を立体的に眺めることができるシステム (Dr. McMenemy のプレゼンスライドより)

2017 年度外国人特任教員 Dr. Park 挨拶

特任准教授 Yoon Soo Park, PhD

I am truly honored to be IRCME's Kimitaka Kaga Visiting Professor. I look forward to meeting new colleagues at Today and throughout Japan. Through collaboration, I hope to share my interests in developing rigorous assessment systems and advancing translational medical education through evidence-based outcomes.

I am a PhD-trained psychometrician and medical educator. My prior experiences include working at testing programs to develop national licensure examinations and to ensure validity of test scores. At the University of Illinois – College of Medicine (UI-COM), I am an Associate Professor and Director of Assessment, overseeing all aspects of assessment from the basic sciences to clinical training. I take a scholarly approach to my educational activities, to inform the curriculum and to ask questions that form subsequent research questions and studies. These activities have led to collaborative research papers with clinician educators. My scholarly interests are in clinical reasoning, competency-based medical education, and advanced psychometric and statistical methods. Professionally, I am an elected member of the Research in Medical Education (RIME) Committee for the Association of American Medical Colleges (AAMC). I am also the Vice President elect for the American Educational Research Association (AERA). International collaboration and teaching are important to my work, and I have facilitated workshops and led faculty development sessions at national and international venues on validity and reliability, generalizability theory, and standard setting.

My undergraduate degree is in Mathematics and Japanese at Colgate University. I obtained my Masters degree in Applied Statistics and my PhD in Measurement, Evaluation, and Statistics, both from Columbia University. In addition to my current faculty position at UI-COM, I also hold affiliated faculty positions at New York University, Tulane University, and the University of Chicago.

I live in Chicago, Illinois with my wife. We enjoy traveling and visiting art museums.

外国人特任教員の招聘に際し、米国財団法人野口医学研究所にご支援をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。(IRCME)



●センター日誌 | 2017年3月～2017年8月 |

3 MAR		19日	第99回東京大学医学教育セミナー 「プライマリ・ケア専門医はなぜ必要か」 (日本プライマリ・ケア連合学会理事長・医療法人社団豊泉会理事長 丸山 泉先生)
7日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会	23日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
17日	第98回東京大学医学教育セミナー 「医学教育の新たな方向性(第4回) —新しい教育モデルは本当に機能するのか— (東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター リンダ・スネル特任教授)	24日	M2 PBL チュートリアル開始 (～6月28日/全5回)
21日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会・補講	26日	臨床導入実習(医療面接実習) (～7月7日/全7回、補講7月14日)
31日	山本一彦センター長退任	6 JUN	
4 APR		14日	平成29年度第2回東京大学医学教育基礎コース「良い教育者になるために」(大西・孫)
1日	山岨達也センター長着任	16日	第100回記念東京大学医学教育セミナー 「2500年前のギリシャの医師ヒポクラテスの“病気の本態・医療・医師”への鋭い洞察について」 (初代東京大学医学教育国際協力研究センター長・東京大学名誉教授 加我 君孝 先生)
3日	プロフェッショナリズム授業(医学科4年生)	20日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
4日(～5月31日)	公共健康医学専攻・保健医療人材育成学開講 (大西・孫/全8回)	7 JUL	
7日	多職種連携授業(医学科4年生/健康総合科学科(看護学コース)4年生合同)	18日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
11日(～7月11日)	平成29年度教養学部・初年次ゼミナール (江頭・孫/全13回)	18日	平成29年度第3回東京大学医学教育基礎コース「インストラクショナル・デザイン」(孫)
11日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会	24日	平成29年度第1回運営委員会
5 MAY		8 AUG	
1日	江頭正人教授着任	18-19日	第49回日本医学教育学会大会出席 (江頭・孫・林)
12日	臨床導入実習 (オリエンテーション・バイタルサイン実習)	22日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
17日	臨床導入実習(医療面接実習総論)	26日-30日	欧州医学教育学会(AMEE)2017出席(孫)
17日	平成29年度第1回東京大学医学教育基礎コース 「医学教育はじめの一步」(江頭・大西・孫)		

編集後記

センターニュース第32号をお読みいただきありがとうございました。また、発行までにご支援、ご協力がくださった方々に心よりお礼申し上げます。

センターニュースは年に2回発行していますが、この半年の間には様々な出来事がありました。新しい指導者の先生方の着任により気持ちも新たに再スタートし、医学教育セミナーの100回開催を祝い、秋には海外からの客員教員や研究生の先生方が加わり、組織に多様性がプラスされたように思います。次号は来年3月発行の予定です。一人一人の持つ世界や可能性を結集して、次号でも多彩な活動をご報告できるよう努めてまいります。これからも成長を続けるIRCMEに変わらぬご支援をいただきますようお願い申し上げます。(み)

発行元

発行 2017年10月5日
 発行人 山岨 達也
 発行所 東京大学大学院医学系研究科附属
 医学教育国際研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 医学部総合中央館2F
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp
 http://www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp
 印刷所 株式会社トライ